

# 調査枠組みの構築手法について

—分析カテゴリーの工夫—

山本 慶裕

(国立教育研究所)

## 1. 問題

生涯教育学会でのこの20年間の研究を「調査研究」という視点から振り返る論文をまとめる、ということが編集委員会からの要望であった。しかし、自分自身の20年間の調査研究についてまとめるだけでも規定の枚数をはるかにこえることになってしまう。そこで、本稿では、これまでの調査研究の実践を踏まえながら、調査研究報告書に書けなかった研究上の問題点を焦点化し、調査研究の枠組み構築の過程について考察することにしたい。

筆者の研究方法は社会学に依拠しているが、出身は「人間科学」という学際科学であり、自然科学と社会科学の両方の手法を組み合わせる技法にも依拠している。また、研究の対象は、国や自治体の生涯学習支援政策や公共と民間の学習事業、そして学習者による生涯学習活動であり、広範囲に及ぶ対象と内容を取り扱っている。

この20年間に取り組んできた主たる研究は、市民の生涯学習活動調査、図書館のネットワーク調査、民間の生涯学習事業調査、国民の生涯学習活動調査、県・市町村の生涯学習支援政策と諸事業、小学校から高校、大学にいたる学校開放事業調査、各国の生涯学習政策とプログラムに関する比較研究と広範囲にわたっている。特に、近年は、生涯学習における現代的課題として、高齢者教育、ボランティア活動、情報化社会論、男女共同参画学習など

の実態についての研究を始めている。これらの研究は、筆者自身の関心による研究から、共同研究も含めて行ってきた。毎年のように統計プログラムを書き、図表を作成し、何冊かの調査研究報告書を書いてきた過程で常に理解しながら、報告で十分表現できない問題が、調査研究の枠組みの前提要件であった。

いろいろな調査研究がそれぞれ特有の政策課題や研究課題をもちながら、理論的課題が実際の調査の枠組みに降りる過程で、多くの研究者自身の主観的な解釈や日常的な世界観がなんらかの形で反映される。そこで、それぞれの調査がどれだけ客観的な実証的研究になっているかが問題となる。統計調査の結果が統計数字となって表現されると、数字の客観的な姿が前面に現れ、その数字の背景にある選択肢の数や優先順序、カテゴリーの構成と作成過程の問題は、ほとんど省みられない。質問文や選択肢、分析カテゴリーの構成には、研究の調査枠組みが客観的な形で表現されるが、それがどのような過程を経て構成されたかは記述されることが少ない。

量的な調査に限らず、少数の面接調査などの事例調査においても、研究者がどのようにしてその客観性を保持するかは大きな問題となっている。多くの学会の編集委員としての経験でも、研究論文を査読していつも問題に感じるのが、この枠組み形成過程の論理的説明が不十分なことである。

実際の調査研究の枠組み形成の過程では、何度も研究会議がもたれ、多くの討議が尽くされることもあるが、研究活動自体が社会的な人間関係から成り、権力関係や利害関係が含まれている。そうした社会的な関係の少ない個人研究の場合は、逆に個人的なチェックに依存せざるを得ず、ますます研究者自身の主観的な枠組みだけが反映される。

研究枠組みの形成過程と得られたデータの分析過程では、個々の研究者の条件として、①研究者自身の能力（知識、関心、技能）の限界、②経験と思いこみ（常識）の影響、③情報内容、情報源（人）や状況に対する感情、④集団の中での同調など社会行動の制約、などがその活動に影響を及ぼす。また、研究活動そのものの条件として、①先行研究の影響、②関連研究に配慮した研究の領域設定や全体理論との関係、③研究の集中の程度、④費用、人材などの物理的条件、⑤研究活動の規則や社会関係等の制度的条件などが研究にいろいろな制約を及ぼしている。

これらの制約が、調査研究の枠組みに影響をまったく与えないとは考えられないし、事実、多くの研究報告の研究概要の部分では、これらの制約の上で行われた研究であることが明記されている。しかし、その制約条件が結果にどのように影響したかについては、明記されないことが多い。結果の信頼性を損なうことは、報告書自体の存在意義に関わるからである。

本稿では、上記の制約の中でも、研究者の経験や思いこみの影響をいかに排除して、いかに研究枠組みを構築するか、その手法について考察することにした。

## 2. 調査研究の枠組み構築の過程

### (1) 仮説検証と仮説探索

実際の調査研究では、まず、調査の主題を決め、対象を設定し、調査内容について詳細に決定していくが、その際、一般的・抽象的なレベルの問題を、調査という方法にあった具体的な意味内容に示す形に変える作業を取る。つまり、作業仮説を設定し、仮説の単位である分析カテゴリを用いて問題の構造を図式化し、調査項目を設定する。

社会調査の場合には、一般的に、事実発見型の調査と仮説検証型の調査の2つがある。筆者がよく行うのは、まず事例調査などの事実発見型調査から問題の構造を探り、そこからいろいろなカテゴリーを発見し、事実を分類、構造化する仮説を立てて、それを統計的な質問紙調査により仮説を実証的に証明する手法である。

### (2) 実証主義と解釈主義

事実発見型か検証かの研究活動のありようが、実証的な方法を重視する実証主義と、事例の解釈を中心とした解釈主義という研究上の立場で分類される場合もある。実証主義の立場にたつ経験的研究では、現実を説明する概念(カテゴリー)が構成され、概念間の関連づけが行われる。その概念が実際に観察可能なものとして、具体的な調査項目や指標に置き換えられ、それらの指標の観察や測定によって仮説が検証される。他方、解釈主義では、現実

を意味の解釈過程としてとらえ、行為者の主観を大切にしながら、事例の解釈（ここでも多様な分類概念や分析カテゴリーが用いられる）により、現実世界を理論的に説明しようとする。

特に後者の客観性の確保については、研究者の主観的解釈の客観性の基準として、①.論理的一貫性の公準；形式論理性の保持、②.主観的解釈の公準；常識的知識からのモデル構成、③.理解可能性；他者の理解可能性、の3つがあるという。（山田、1999）

両者の立場では、「客観性」の意味が異なっている。特に前者の場合には、研究者が仮説的に構成した概念を、現実的で具体的な操作的定義に置き換えることによって、誰が認識の主体であってもその方法の結果が共通になる、という認識方法の客観性を主張する。これに対し、後者の場合には、他者の理解可能性や日常的な知識による説明を客観性の保証基準としているのである。

いずれの方法をとるかは、研究対象や目的、研究者の適性や研究への視座による。

ただし、いずれの場合も、研究者がなんらかの認識枠組み、概念的な体系である理論（分類カテゴリーを単位とした概念の体系）によって、経験的事実をどう説明するかという点では共通の性格をもっており、問題へのアプローチが異なるとみられる。いずれの場合も、研究の実践では、理論的研究と経験的研究の相互活動から構成されている。

### (3) 理論的研究と経験的研究

研究者が事実を説明する際に用いる理論がどのように構成されていくかを考える時、理論が先か、事実が先かの選択肢があるようにみられる。まず「最初に事実ありき」で、既存の理論で説明できない事実が現れた時には、状況に応じた理論を開発する場合も生じる。しかし、他方で「最初に理論ありき」で、既存の理論を適用することに優先順位が置かれ、理論に適用できない事実が現れた場合には、事実を排除することも辞さない理論信仰型の研究も考えられる。そもそもすべてを説明する理論の存在を信じること自体が、一つの信仰であるとみることもできる。

実際には、理論的研究と経験的研究の長所をどう活用するかという点が重

要である。

山田一誠は、マートンを引用しながら、理論には、①方法論、②一般の方針、③概念分析、④事後解釈、⑤経験的一般化、⑥社会学理論、の6つの意味があり、③、④、⑥について次のような有効性を説明している。概念分析では、調査概念の再検討により、研究者が陥りがちな「思いこみの発見」に有効であり、研究者や調査の暗黙の前提を明らかにできる。事後解釈では、「どんなデータも事後的にもっともらしく解釈することが可能」である以上、その客観性を保証するためには、解釈の正否の検討や解釈の妥当な条件を限定したり、理論的な基礎に基づく結果予測のための調査によって得たデータから、新しい調査データの「信頼性を保証」することが重要であるという。また、社会学理論自体が、経験的な研究の成果を「相互に関連づけ」、「予測の根拠」を提供できる助けとなる。

他方、経験的研究は、理論的研究に対し、①理論を作り、②理論を再構成し、③理論的焦点の転換を促し、④概念の明確化を促す効果がある。特に、理論の再構築にあたっては、理論に不適合なデータを得ることにより、新たな説明が求められた場合には、「データが概念図式の精緻化を促す」点に、経験的な研究の必要性がある。

いずれの場合も、経験的研究と理論的研究のサイクルとダイナミズムの中から、それぞれの研究にとって有効な効果があること、研究者がそれぞれの研究活動のダイナミズムの中で活動することが前提として考えられている。この理論的研究と経験的研究を結びつける一つの考え方に、「中範囲の理論」があるが、それはこの関係そのものを説明する一つの「理論」であり、具体的な方策が示されたわけではない。

### 3. 枠組み構築の方法

#### (1) 概念図式の発見法

実際の調査活動の中では、調査を実施する前に何度も研究会議を開き、多くの概念を整理し、調査の目的や内容、方法を照合しながら、得られるべき結果を想定して、調査の設計を行う。その過程では、理論からの演繹や、先

行データの検討，類似調査の結果などからの帰納的推論を行い，調査の枠組みを決定している。

だが，多くの場合，研究活動がどれだけの先行データや研究を踏まえているか，また研究に参加する研究者がどのような理論的指向性をもつかで，調査の枠組みが決められ，その過程は必ずしも妥当な手続きをふまず，恣意的な様相をもっている。多くの研究者が，自分なりの研究枠組みや分類カテゴリーをもって分析を行う傾向がある。同様の傾向は，学会の論文や研究発表の中にも現れており，いつも問題になるのがそれぞれの研究者の調査研究枠組みなのである。そこで重要な点は，理論を現実の経験的研究に降ろす時，逆に，経験的研究の成果を理論へと積み上げていくのに，どのような手順を踏むかである。

これまでの論理的な方法としては，理論からの演繹法，データからの帰納法，両者を折衷した仮説推論法の3つが考えられている。また，問題やデータの中から，隠れた秩序を発見する方法としては，KJ法，データ対話型理論（grounded theory）などがある。以下，KJ法についてはいろいろな説明書があるので省略し，その他の方法を概観する。

## (2) データ対話型理論

データ対話型理論は，観察や面接によって収集されたデータ（会話，行動，文書，映像など）から「カテゴリー」とその構成要素である「特性」を抽出する作業が中心となる。既存のカテゴリーだけでなく，理論を説明するのに有効なカテゴリーの新たな探索が行われると，そのカテゴリーに当てはまらないデータに対しては，新たなカテゴリーを増やしたり，カテゴリーの作り替えが行われる。（直接的な例ではないが，カテゴリーの例としては，学習領域のコードの変化や，バーンシュタインの対話分析における言語コードなどの例がある。）こうしたカテゴリーは，一般性を持つと同時に，できる限り日常的にわかりやすい表現がとられる。そこには，調査対象者を生活者としてとらえ，生活者の言葉の中で用いられる概念をできる限り活かしていくという対話型理論の考え方があるためである。

ある程度のカテゴリーが作成された時点で，カテゴリー間の関係や，階層関係，包含関係を練り，調査対象を変えることによって，そのカテゴリーの

妥当性を検討することもできる。こうしてデータの収集とカテゴリー化を繰り返すことにより、カテゴリーの飽和状態が生じる（理論的飽和）。このカテゴリーを用いた理論により、新たなデータの説明が試みられ、理論の進化が図られていくのである。

この手法は、研究者の概念図式の構築を、調査対象者のデータから行う点、データ的具体性を活かしている点、それが累積されることによる一般化が可能な点などの長所をもっている。

### (3) 学習方略システム

学習法の研究例としては、教育心理学や教育学の研究で、こうした分類カテゴリーを用いた分析がよく行われている。たとえば、辰野千壽は、ワインスタインの学習方略システムを次のように紹介している。

ワインスタインのシステムは、主要方略として、Mood（動機づけ、注意の集中）、Understanding（理解、ポイントの把握）、Recall（再生）、Digest or Detail（熟考、関係づけ、詳細の再生）、Expand（拡大、体制化）、Review（復習、見直し、再検討）の六段階からなる。この方略の学習のタイプを、①リハーサル（逐語的に反復する、模写する、下線を引く、明暗をつける）、②精緻化（言い換える、記号化する、イメージや文を作る、キーワード法、要約する、質問する、ノートを取る、類推する、記憶術を用いるなど）、③体制化（グループ化、順序化、図表化、概括、階層化、ネットワーク化、キーワードとトピックの利用）、④理解と監視（自問する、一貫性をチェックする、再読する、失敗を見直す）、⑤動機づけ（不安の処理、注意集中、自信や自己効力感をもたせる、生産的環境を作る、時間を管理する）、の5つのカテゴリーでその具体的方法を分類している。

### (4) インフォメーション・マッピング法

また、従来の社会教育や生涯学習の分野では、いろいろなアイデアを発想し、概念を整理する方法として、①論理的発想法（チェックリスト法、5W1H法）、②集団的発想法（KJ法、ブレインストーミングまたはブンブン会議）、③システムの発想法（種や芽つまり利用可能資源とニーズの対応を行うシーズニーズ・マトリクス法、構造図作成法）、などを用いてきた。

## 94 特集 生涯学習研究の課題を問う

たとえば、システムの発想法の一つに、インフォメーション・マッピング法と呼ばれるものがある。これは、情報を次の七つの原則にしたがって、分類する。

- (1) chanking : チャンキング (小さな情報に分類) する
- (2) relevance : 関連性を確保する (一ブロック一テーマ)
- (3) labelling : ラベリングする (見出し)
- (4) consistency : 一貫性を確保する (用語・構成の統一)
- (5) graphics : 図表にまとめる
- (6) detail : 詳細情報を提供する
- (7) hierarchy : チャンクとラベルの階層化を行う

さらに、情報を、インフォメーション・タイプとインフォメーション・ブロックの二つの単位に分けながら、七つのインフォメーション・タイプとして、次の概念を用いて分類する。

(1)手順, (2)プロセス, (3)構造, (4)概念, (5)原則, (6)事実, (7)分類 (具体例については注を参照のこと)

このそれぞれを次のインフォメーション・ブロックによって配置して、情報の見取り図を作り、問題の構造を明らかにしていくのである。

対比, ブロック図, チェックリスト, 分類表, コメント, 意志決定図, 定義, 説明, 図表, 例, 詳細な手順, 事実, フローチャート, 式, 表記法, 目標, アウトライン, 部品表, 原則, 規則, 定理, ワークシート等

図1 インフォメーション・ブロックの例; 概念図の分類

問題は、こうした分類法が、研究の対象や目的に添って、どれだけ妥当で、有効なのかという点である。

これらの発想法を単に実用的な発想法としてとらえ、俗物的な視座でみるのではなく、新たな知識や概念の構築法としてとらえることは、生涯学習における方法論研究のためだけでなく、情報化社会の中の生涯学習論を構築する上でも重要となってくる。ここでも認識の転換が重要なのである。

プラトンの対話法・分割法, アリストテレスの論理的分類法, リネンの植物系統図, デューイの十進分類法などは、既存の知識をいかに体系化するかの努力の賜物であるが、これらを単なる分類法ととらえず、知識や情報の体

系化と捉えることも重要な点である。分類や発想の実用的方法ととらえるだけでなく、これらの方法の技術的な側面に注目することにより、現実の研究活動への応用が可能となるのではないだろうか。

表 固有の価値をめぐる概念

①個人に固有のもの（かけがえない人） 個性だけでなく、知識や経験、技能、感覚、専門的知識・技能、美的・倫理的センス、活動、くせ、風体、話し方、動き方、持ち物、想い出など
②特定の他者と共有するもの 体験、知識、価値観や世界観、技能、同一性、趣味や生活
③集団に固有の価値 家族、企業、社会教育団体、文化・スポーツ団体など
④地域に固有の価値 気象：空や空気、風など 自然：山や川、森など 人の手が入った自然風景：畑や道、林、家畜など 構築物：家や橋、寺、広場、遺跡など 街路や移動物：街路灯や時計、交通、標識など イベント：祭りや大会、行事、民謡など 景観や景色：自然と人工物のまとまり 雰囲気：風格、活気、不思議さ、静けさ、温かさなど 人間：人間国宝、専門職、ボランティア、政治家、個性ある市民 飲食物や特産品：自然水、料理、特産物、文化的作品 物語や歴史：民話、伝説、庶民史、政治・経済史 独自の運動や活動：生活運動、教育運動、文化活動

##### (5) 固有の価値の発見

たとえば、具体的な概念の分析として、筆者は、生涯学習論で用いられる「to be」概念について、「人間として生きるための」学習という説明にとどめず、to be 「what」, 「how」などの問題設定を立て、価値についてのブレンストーミングを行ってきた。

be 動詞は存在動詞であるが、そこでどのような人間の存在価値が問われる

かについて、多くの学習者からの情報を得て、上記のような概念分類を行っている。それは存在価値の発見、特に、人や集団、地域の存在に固有な価値が何かを成人の学習者に考えさせる作業である。それと同時に、価値をめぐるカテゴリーを再編する作業でもある。

#### 4. 研究活動の再考

以上、多様な分類カテゴリーを発見し、工夫し、活用する方法を検討してきたが、問題は、どのような分類カテゴリーを用いるかによって、経験的事実のイメージがまったく異なってくることである。学問は、分類カテゴリーの継続的使用を図ることによって、事実のイメージの保存と変化を探る営みであるが、そのカテゴリー自体に問題がある場合には、事実を他のカテゴリー（分析用具）でとらえなおす必要もでてくる。眼鏡を変えると、世界がまったく異なって見えてくるはずである。時代や状況の変化にしたがって、いろいろな分析用具を用いなければ、問題や構造の変化を発見することができないのではないだろうか。

1996年に刊行された『学習：秘められた宝』という21世紀の教育を指針づけるユネスコの報告書は、今後の教育におけるグローバルな視点の必要性を主張し、生涯学習に4つの柱があるとした。その4つの柱とは、「知ることを学ぶ」、「なすことを学ぶ」、「共に生きることを学ぶ」、そして「人として生きることを学ぶ」であった。すなわち、私たちがいかに学ぶかを学んで自己学習能力を身につけるか、その知識を自然体験や社会体験など多くの体験学習を通じていかに実践に結びつけるか、そしてすべて相互に依存しあって生きていることや共通の努力を行って、共に生きることを学ぶか、そして自らが人間として生きることを学ぶか、という柱であり、いわば生涯学習の4つの目標であり、原則である。

これらの概念を学習者対象の説明に用いるだけでなく、研究者自身の研究活動に適用するとどうなるであろうか。視点の変化は、分析用具の変化の必要性も意味する。

調査研究法の発展は、コンピュータ技術の発展に伴い、加速度的に進化し

ている。統計的分析法の利用が容易に行えるというだけでなく、言語や専門的知識の増加も進む。しかし、手法に溺れることなく、効果的な研究成果を生むためには、研究の分析枠組みが非常に重要である。概念的道具の発見や精緻化の手法を概観すると、コンピュータや情報科学の発展の過程で生じつつある、人工知能理論や言語理論の方向性との整合性をみることができる。シソーラスのコンピュータによる作成が一般化しつつあり、地域情報のコミュニティにおける共有化や知識ネットワークの発展は、研究者の概念図式の豊かさを保証する一方で、生涯学習関係の研究者のさらなる専門化と「生涯学習」についての固有の研究枠組みを要請していると考えられる。

#### 参考・引用文献

- 1) 山田一誠他編著『みえないものを見る力』八千代出版, 1998
- 2) 箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際』, ミネルヴァ書房 1999
- 3) 吉田政幸『分類学からの出発』中公新書, 1993
- 4) 辰野千壽『学習方略の心理学』図書文化社, 1997
- 5) R.E. ホーン, 『ハイパーテキスト情報整理学-実践編』, 松原光治監訳, 日経 BP センター, 1995
- 6) 山本慶裕『学びのデザイン』玉川大学出版部, 1998

(注)インフォメーション・タイプの具体例; -生涯学習と情報化をめぐる諸概念-

(概念) 高度情報化社会とは、広義には、社会の多様な部門において種々の情報が非常に重要な価値を持つようになる社会を指すが、とりわけ経済的な部門において情報の経済的価値が高まり、情報を取り扱う産業が他産業に比較して大きな比重を占めるようになる社会である。

(分類) 上田閑照は西田幾太郎の人生を通じて人間の生涯を「人生」、「歴史的社会的生」、「境涯」の三つの相から考察した。「人生」や「歴史的社会的生」に対し、「境涯」とは、その人の「生き方」であり、処世術ではなく、「死」という崖に対した「一生の質」を意味する。「境涯」とは何年生きたかといった量ではなく、生きることの意味を問いかける。

(過程) 農業革命という第一の波によってもたらされた文明は、大家族制度と土地を基盤にした社会を生み、再生可能なエネルギーを用いたが、情報網は権力者に独占された。第二の波は、産業革命によって新たに生み出された大量生産システムであ

## 98 特集 生涯学習研究の課題を問う

り、主なエネルギー源は石炭や石油という再生不可能な燃料で、機械的な反復作業に耐える人間の訓練を行う公共教育、地理的移動が容易な核家族、巨大な労働管理組織となる株式会社といった社会制度が発展し、原料や生産品についての大量の情報が生産され分配された。

(事実) 戦前日本では一人の女性が平均4-5人の子供を産んでいたが、死亡率も高く、1930年には乳児死亡率は1000人中124人(同年の出生1000人について、出生後1年未満の死亡)であったが、1950年には1000人中60人、1970年には1000人中13人となり、今では5人を割り、産まれた子供のほとんどが育つようになった。

(構造) 音楽は曖昧な意味をもつ曲(リズム)と詳細な意味をもつ詩(ことば)から成る。音楽は、時に喜怒哀楽をもたらす「祭りの機能」やおごそかさをもたらす儀式的効果的表現として使用され、同一感を形成したり、集団への参加を促し、なんらかのメッセージの伝達手段として働く。

(手順) 企画を行うためには、現状分析(観察)を行って課題を発見、多くの課題の中から特定の基準や枠組みにしたがい優先課題を決定、その実現可能性を調べ、調査結果を整理し、構想を練る。さらに、構想を具体化する企画書を作成、説得を行い多くの人の理解を得て、実施の意思決定が下され、最後に事業が実施されることとなる。

(原則) ユネスコの生涯教育の目標は、科学的思考(考える)を行い、創造性を求めて(造る)、社会的責任をめざし(参加する)、そして最後に完全な人間をめざす(生きる)ことにある。